

禮式なり。此の日北條町にては花車及び曳船數臺を出す。参拜者老幼男女四方より膺集し、頗る雜沓を極む。實に其の繁盛なることに於て本郡第一の祭祀なり。宮崎竹堂の詩に曰く、

鑿々歌鼓賽應神、千百輿丁皆裸身。

閑却清光一天月、攤船鬪酒彼何人。

此の詩以て當日の光景を想見するに足る。但し今は輿丁裸身に非ず。黒の烏帽子に白の輿丁衣を着く傳へ曰ふ、本社祭祀の起原は往時本社元府中にあり。當時國司毎歲各神社を巡拜せしを、後之の煩を省き、各神社の神輿を府中の八幡社に渡御せしめ、國司之に臨みて奉祀せしが、今の八幡祭祀の起原なりと。

布良崎神社

布良崎神社は、富崎村布良字西本郷高阜の中腹に在り。前は洋々たる太平洋に面し、布良市街を一望の下に瞰下し得べく、頗る展望に富める好位置にあり。布良區民の氏神となす。祭神は天富命にして金山彦命、素盞鳴命を配祀す。境内七百三十八坪、境外一段十三歩の地を有す。從來八月一日を例祭とせしが、明治四十二年改めて七月二十日とせり。明治十七年甲申七月郷社に列せらる。

本殿は木造神明造銅板葺(桁行二間半)拜殿は木造入母屋造瓦葺(桁行四間半)にして、共に氏子一月一日三厘宛八ヶ年間の醸金を基とし、明治四十一年八月建築したるものに係る。社殿外城の玉垣は、大正四年七月御即位御大典の記念事業の一として建造したるものなり。

1) 社 寶

寶物として石斧(由緒不詳長形青銅にして、石劍(天富命御用の品と傳ふ青銅二)を藏す。寸方至三寸長五五分長二尺九寸)を藏す。

(口) 由 緒

按するに上古神武天皇即位の始め、天富命をして日鷲命の孫を率ゐ、肥饒の地阿波を求め、麻穀を播殖せしめ給ふ。即位の五年天富命更に沃壤を東國に求めんとして、阿波の齋部を率ゐ、來りて房總の地を開拓し給ひ、齋部は此所に居をなして、麻穀の播殖を奨勵し、其の好き麻の生する所を總の國といひ、阿波齋部の居る所を安房の郡と名け給ひ、此の地に天太玉命の社を立て給ふ。今の安房社はなりと、古語拾遺に見ゆ。即ち天富命は我が安房國開拓の祖神にして、命の此の地に移り給ふや、先づ其の祖神太玉命を祀りて、氏人の神となし給ひしものにして、其の後安房社には天富命をも配祀し、之を奥殿となし、布良崎の社を前殿となせしこと古書に見ゆ。誠に由緒ある神社といふべきなり。(富崎村誌)

莫越山神社

莫越山神社は豊田村杵見の南方丘上に鎮座す。境内九百坪、祭神は彦火々出見尊を、梅大明神と稱し、豊玉姬命を子安大明神と稱し、鷓鴣草葺不合尊を間子大明神と稱せり。今之を台祀す。別宮一座小屋安大明神と號す。忌部の神、手置帆負命、彦狹知命を祭る。元正天皇の御宇養老二年乙未五月の勸請に係ると云ふ。

社傳に曰く、神武天皇元年天富命齋部の諸氏を率ゐて此の土に來り、(神)之を安房社といふ。此の時手置帆負命、彦狹知命を莫越山に鎮め祀る。古語拾遺曰、天富命分阿波忌部率往東土、(神)今、謂是安房